

# ノーモア・ヒバクシャ通信 第62号

2022年12月22日

ホームページ <http://www.nomore-hibakusha.org>  
継承ブログ <http://keishoblog.com/>  
フェイスブック <https://www.facebook.com/kiokuisan>  
ツイッター <https://twitter.com/nomorehibakusha>

発行者  
NPO 法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会  
〒102-0085  
東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F  
Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)  
Email [info-kiokuisan@nomore-hibakusha.org](mailto:info-kiokuisan@nomore-hibakusha.org)  
郵便振替口座 00110-5-292881  
口座名義 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

## 《目次》

- I. 国連原爆展 in Tokyo 「ヒバクシャ—核兵器廃絶に取り組む勇気ある人々」  
～人間にとって核とは何か、被爆者の思いを伝えました～
- II. 国連原爆展 in Tokyo 「交流のひろば」  
～東京、ニューヨーク、長崎をオンラインで結び、開かれました～
- III. 秋の「ノーモア・ヒバクシャ」関連行事のご報告
  - 〔1〕 昭和女子大学戦後史プロジェクト  
2022 秋桜祭 60 年代に焦点をあてた企画展「被爆者の「選択」
  - 〔2〕 核兵器廃絶ネットワークみやぎ 講演会&第1回総会の報告

- I. 国連原爆展 in Tokyo 「ヒバクシャ—核兵器廃絶に取り組む勇気ある人々」  
～人間にとって核とは何か、被爆者の思いを伝えました～



日本被団協制作の国連原爆展が、11月11日～13日、東京・外苑前の日本青年館で展示されました。「国連原爆展 in Tokyo」実行委員会主催。200人を超える来場者を迎え、8階会場では被爆者と来場者が懇談する姿も見うけられました。また、アンケートやメールで多くの感想が寄せられました。一部を紹介します。

「日本以外のところで原爆についてどのような展示がされたのか知ることができてよかったです」(神奈川県 50代)

「反戦、原爆反対、と言う私は本当にその恐ろしさを理解しているのかと、自分を問い直すきっかけになった」(神奈川県 10代)

「被爆国である日本なのに、現政府の対応があまりかけ離れているのに失望します。でも、今の若者、日本のみならず世界の若者の中の広がりを知って希望が湧きました」(東京都 60 代以上)

「かつて何度かお会いした被爆者の写真がありました。すでに亡くなられた方も多し。一方で若い世代に被爆者の思いは確実に届けられつつあることも感じます。この流れを私もひきつぎたい」(東京都 60 代以上)



「核兵器の恐ろしさは TV ドキュメントで知っていたが、こうして展示のパネルを目の当たりにして、より強くその恐ろしさを感じた。やはり核兵器は廃絶すべきと思いました」(東京都 50 代)

「原爆に関していろいろ目や耳にすることはあったが、その前に実験やウラン鉱山での被害など

知ることが少ないので興味深かった」(東京都 50 代)

「戦争の勉強をずっとしてきたので、原爆の話ももっと知りたいと思いました」(滋賀県 10 代)

「日本青年団として今後も平和運動を続けていきたい。国連常任理事国全てが核抑止力論のもと保有している状況が本当に怖いと感じました」(宮城県 40 代)

「みんなで考えていかななくてはならない。被爆者だけの問題ではなく人類の問題だということをあらためて感じました」(60 代以上)

「全世界に発信すべきことだと思いました」(東京都 20 代)



日本被団協は広く全国各地での展示を呼びかけています。さらにノーモア・ヒバクシヤ記憶遺産を継承する会は、国連原爆展を世界中の多くの方々に観ていただけるよう、Web公開の可能性を検討しています。

## II. 国連原爆展 in Tokyo 「交流のひろば」

～東京、ニューヨーク、長崎をオンラインで結び、63人が参加して開かれました～

「国連原爆展 in Tokyo」最終日の11月13日（日）午後には、「交流のひろば」を開催しました。日本青年館8階の会場とニューヨーク、長崎をオンラインで結び、日本被団協の国際活動をふり返りながら、国連原爆展に込められた被爆者の願いをどう受けとめ引き継いでいくか、それぞれの取り組みや課題を交流し合いました（参加者63人）。

日本被団協代表理事・家島昌志さんのあいさつで開会后、第一部は、日本被団協の木戸季市事務局長がビデオメッセージで問題提起。次のように（要旨）述べました。

### 【木戸さんの問題提起】

1940年に生まれ、長崎で被爆した私は、これから日本は戦争をしないという9条と日本国憲法を生きる支えとしてきた。その憲法はこれまで危機にさらされ続けてきたが、今や戦争前夜の感を強くしている。

被爆者運動は「ふたたび被爆者をつくらない」ことを願い、核兵器の廃絶を世界に、原爆被害に対する国の償いを国に求めてきた。その核心は、被爆者の苦しみに根ざし、原爆が人間に何をもたらしたかを徹底して調査・研究してきたことにある。

国際活動では、人間として死ぬことも生きることも許さない、核兵器の反人間性と、核兵器は廃絶するしかないと訴えつづけ、それを国際社会が受けとめるようになって禁止条約につながった。

国連での原爆展開催は2005年に始まり、国連との信頼関係を築いてきたが、毎回物心両面にわたる大事業だ。写真使用の著作権許諾をはじめ国連軍縮局・広報局との意見交換など、パネル制作には数年を要し、生協の1千万円以上の募金やニューヨークのデザイナー、通訳ボランティアのみなさんの協力で支えられてきた。

プーチンのウクライナ侵略がつづくなか、6月の核兵器禁止条約第1回締約国会議では、「廃絶まで休むことをしない」と謳ったウィーン宣言と行動計画が採択された。8月の第10回NPT再検討会議では、ロシアの反対で最終文書の合意はできなかったものの、圧倒的多数の国が核禁条約とNPTの一体・補完性を強調した。

被爆者がいなくなる近い将来に向けて、被団協は徹底討論を通して、被団協運動を受け継ぐ国民的な新たな運動を創り出そうとしている。戦争前夜を思わせるいま、岸田内閣の反国民的な政治からいのちとくらしを守る国民運動を、対話と事実を基礎に、老年・壮年・若者が一体となって、どのような運動をすすめていくかを考え合いたい。



「ひろば」の第二部は、二村睦子理事（日本生協連）の司会で登壇者のみなさんによる交流。木戸さんの問題提起への感想を含めた簡単な自己紹介の後、8月のNY行動を紹介する短い動画（日本生協連制作）が上映され、① 国連原爆展と被団協の国際活動について、② 国連原爆展に込められた

被爆者のメッセージをどう受け継いでいくか、の2点にわたって話し合われました。

ここでは、登壇されたみなさんの発言の要点をご紹介します。

### 【交流のひろば 登壇者のみなさん】（敬称略）

遠山 京子（ニューヨークボランティアのコーディネーター。ニューヨーク市立大学ラガーディア校カウンセリング学科教授）、Zoom 参加

朝戸理恵子（原水爆禁止日本協議会全国担当常任理事。被団協ブックレット『被爆者からあなたに』の英訳チームの中心となって取りまとめにあたる）、Zoom 参加

松田あすか（長崎県立大学地域創生研究科1年、全国大学生協連 院生委員会）、Zoom 参加

林田 光弘（長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）特任研究員、元ヒバクシャ国際署名キャンペーンリーダー）

濱住 治郎（日本被団協事務局次長、広島で胎内被爆）

### ● 木戸さんの問題提起をめぐって

▶ 胎内被爆で「あの日」の記憶のない被爆者として、ふたたび被爆者をつくるなど世界を動かし禁止条約成立に至った先人の努力に頭が下がる。核の脅威に対して、高齢化した被爆者がどうとりくむか、憲法の意義を強く感じる。（濱住）

▶ 被爆者と日本被団協のたたかいが、日本国憲法を守るたたかいと一体のものだと強く感じた。人類全体の現在と未来を守るたたかいは、私たち自身のたたかいだ。（朝戸）

▶ NPT再検討会議に木戸さんといっしょに参加して、被爆者が続けてきた行動力と熱い

思いに感銘した。若い私たちがバトンを引き継いでいくきっかけになれば、と思い参加した。(松田)

▶ 被団協の運動は、結成宣言～国家補償の援護法（戦争と原爆投下の関係、人間存在の全面に及ぶ原爆被害を明らかにした）～核兵器の非人道性を根拠にした禁止条約と、核兵器を〈人間〉の視点でとらえ、それに抗わねばならないと一貫している。こういう思想は被爆者だけのものではない、僕らみんなにつながる普遍的なものだ。(林田)

## ● 被爆者の証言・活動をサポートして

▶ 35年前、朝戸さんの紹介で初めて被爆者の話を聞いて涙が止まらなかった。アメリカの人たちに被爆者の話を聞かせたいと思い、4年に一度の機会にボランティアを募り、通訳、証言の場の提供、地元の人々との交流を準備してきた。学校訪問で、僕たちに何ができますか？と問う子に、木戸さんは「今日聞いた話を、家に帰って家族に話してくださいね」と答え、高校生でも平和運動の一步が踏み出せると思った。

ボランティアをして人生が変わった。そういう体験を皆にしてほしい。日本人として、人間としての責任を学ばされている。(遠山)

▶ 遠いところから、大きな希望を抱えて来てくれた。若い人たちにどう手渡していくかが一番の悩みで、横のつながりをもっていく草の根の運動が大事だと思う。デジタルの時代、全世界の問題としてみんなで考えないと大変だ。(ストロー初代=NYボランティア)

▶ 原爆・ヒロシマ・ナガサキは、学生の頃は思い出したくない恐ろしいことだった。それを伝えつづける被団協の人たちがいて、きらきらして使命感をもって活動している。悲しみや怒りを超えた人間のいのちの尊さを考えた、緊張感のなかにも楽しいボランティアだった。(遠藤真理子=NYボランティア)

▶ 被団協のブックレットの英訳には、英語で力になりたいと、4月から10数人が協力してくれた。6月の締約国会議に間に合わせて被団協のホームページで公開し、8月には印刷物にしてNYに持って行っていただくことができた。この冊子には、被爆者の今伝えたいこと（人間への甚大な影響、被爆者の長いたたかい、次の世代への期待と希望）が詰まっている。英語版の世界への普及とともに、知り合いや友達と直接話すことが力になる。

被爆者は、今生きる私たち、次代の子どものために、自らを変革して、政府、核保有国、国連へ働きかけてきた。崇高な生き方に心動かされ、近づきたいと思う。(朝戸)

## ● 核兵器禁止条約の意味

▶ 「小さな国なんて」と思いがちだが、条約が採択されたとき、小さな国の名前が次々と掲示板に出た。8月NPTR再検討会議の最後の日にも、小さな国の若い人たちが来ていた。こうした国にも呼びかけて情報交換ができたらいい。「国連」というが、市民運動をしている人たちが連携し、市民が立ち上ることに焦点をあてたい。(遠山)

▶ ヒバクシャ国際署名の活動を開始したときには想像もしていなかったが、署名の開始から終了後も含めて、条約の誕生・発効、批准国増と重なった。条約とは新しいルールをつくること。必要悪としての核兵器を認める世論に対し、人間の立場から絶対悪の世論を広めること。それを無視する政府と世論を肯定しているのは日本の国民だが、それだけが世論ではないことを1370万の署名が示した。

国際署名は、① 核兵器の非人道性・絶対悪としての核兵器、② 対立から協調へ（同じ組織になるのではなく、各組織・個人のやり方で共通署名を集める）、③ 国家ではなく、個人の視点で核兵器をとらえる（多くの人が運動の当事者として、核兵器を自分にひきつけてとらえるようになる）という点で、被団協運動の集大成だと思う。（林田）

## ● 被爆者運動が築いてきたもの 国際社会の受け止め

▶ 多くのみなさんの協力・支援のもとに被爆者運動の今がある。原爆展パネルNo. 30～37「国連と被爆者のあゆみ」には、被団協の結成宣言に見るように、最初から世界・人類を想定した活動をつづけて来たことが示されている。禁止条約について、ホワイト議長は「理性とハートを結ぶ血の通った温かい条約」、「被爆者が共有している経験は、人間の魂にふれるもの」と言い、中満国連事務次長・軍縮担当上級代表は「被爆者に捧げられるべきもの」、「背後にある道徳的な原動力は、核抑止の冷徹な顔に人間の顔を映す」と言われた。（長年にわたる運動のなかで）核兵器の反人間性、核兵器が人間と共存できないことをしっかり位置づけてきている。（濱住）

▶ NYでは生協チームの活動に加わり、イギリス、オーストリア政府の代表部に要請した。オーストリアでは「被爆者の思いを受けとって仕事をしていく」と発言があり、非核国の使命感を感じた。再検討会議の一般討論（8/1～4）では130の国・地域が発言。原爆の日を前に、広島・長崎への言及が相次いだ。施設内をめぐるツアーには、現地の若者や家族づれが訪れていて、日本の政治参加とのギャップが気になった。ドイツから来た若者たちとの交流では濱住さんが証言。帰国したら被爆者の話を周りに広げていきたいという声を聞き、確実にメッセージは伝わっていると感じた。（松田）

▶ NYの地元でも国連に足を踏み入れていない人がほとんど。国連との距離をどうやって近づけるかが課題だ。他の都市でも、国連に来られない人でも見られる工夫があったらよい。テクノロジーを活かした発信が絶対に必要だ。（遠山）

▶ 国連原爆展の内容も、毎回、国連軍縮局などとの討議を重ねて変わってきている。私が見たのは1、2回のみ。集大成と言われる今回の原爆展もぜひ見たい。他の都市での開催にとり組むとともに、写真の著作権の問題もあって簡単ではないが、国連に来られない人も見られる工夫があったらいい。（朝戸）

▶ 原爆は戦争の中で使用された。外国では広島・長崎に対する視点は日本とまったく異なるが、長崎では原爆は被爆体験としてのみ語られ、戦争の文脈が欠落しがちだ。被団協は粘りつよい活動で、世界中に仲間を増やしてきた。禁止条約が生まれたことで、かつてな

く被爆体験が伝わりやすくなっている。国外で仲間づくりをすすめる、被害・加害を超えて被団協を支えるネットワークをつくりたい。(林田)

### ● 受け継ぎたいこと

▶ 学部時代から続けてきた平和公園の形成過程の研究(ハード)プラス、どう若い世代に伝えていくか、継承方法の考察(ソフト)の両面からとり組んでいきたい。NPTの経験を記事にして大学のHPに掲載してもらった。国際交流委員会と協力して、学内で報告会をするなど、より多くの場でより多くの人に届けられるようにしたい。

「生の声を聞ける最後の世代」と言われてきたが、それは「語り継いでいく最初の世代」ということでもある。先輩が言ったように、無関心でいられても、無関係ではられない。自分に興味のある面からアプローチしていけばよいと思う(自分は研究から)。(松田)

▶ こういう形でみなさんの話を聞けるとり組みを定期的にできればよいと思う。NYと日本だけでなく、世界の日本人・活動家とともに。被爆者には、元気なうちはぜひ来てほしいが、次に来られるまでの間、持続することが大切だと思っている。(遠山)

▶ 被爆者は核兵器のない世界をつくることを、被爆者として生きる使命としてきた。それを私たち自身の使命とすること。日本政府に禁止条約の署名・批准を求める署名を広げ、核兵器廃絶を主導する国にかえることが、私たちの世界的使命だ。(朝戸)

▶ 日青協では、ブックレットの輪読から原爆展の開催につながった。いっしょに学び合うことで、次につながる疑問や課題が出てくる。小さくても場所がある、インターネットでつながる、“ノーモア・ヒバクシャ”継承の拠点づくりを世界中に広めたい。(濱住)

最後は、実行委員の棚田一論さん(日青協事務局長)による閉会のことば。この原爆展に並行して開かれている全国青年大会が、戦後、戦争の惨禍を繰り返さないため平和への「不断の努力」を形にしようと開催してきたスポーツ、芸能、文化の大会であると紹介。全国各地から集まった青年たちにパネル展見学を呼びかけ、見れば目の色が変わった。気づくことが大事。これからも地域でいっしょに頑張っていきたい、と締めくくりました。

### Ⅲ. 秋の「ノーモア・ヒバクシャ」関連行事のご報告

#### 〔1〕2022 秋桜祭 60年代に焦点をあてた企画展「被爆者の「選択」

昭和女子大学「戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト」

2022年11月12日から13日にかけて開催された昭和女子大学秋桜祭において、私たち「戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト—被団協関連文書」のメンバーは、企画展「被爆者の「選択」」を展示いたしました。今回は、現在まで続く被爆者運動の礎を築いた被爆者が、冷戦下の国際情勢や課題に対して取った「選択」について、24枚のパネルを用いて紹介しました。



1960年代前後には核大国によるめまぐるしい外交が展開されます。核実験を停止し「平和の使徒」として振る舞ったソ連、核兵器使用が危ぶまれたキューバ危機、フランスの核実験を「控える」ように呼びかけた

国際世論、核軍縮を目指しながらも核大国の覇権が露わになった部分的核実験禁止条約などの国際情勢に対する評価は国や個人によって異なり、世界各国を始め、日本の人びとも翻弄されました。ビキニ事件を期に力強い国民世論に押され立ち上がった原水爆禁止運動も意見の食い違いから分裂を余儀なくされ、原水爆禁止運動を「ゆりかご」として立ち上がった被爆者も大きく動揺します。

混乱する国際情勢のなかで、被爆者たちは原水爆禁止運動から自立して主体的に考え、行動し、決断することが迫られました。当時の被爆者たちは、被爆者運動の進め方や原爆の被害の捉え方などをめぐり、一人ひとりの意見をぶつけ合いました。私たちは、この激論がその後の被爆者運動の民主的な運動方針を決定づけたのだと考えました。

さて展示会場には、ご来場いただいた方々の率直な感想をいただくため、感想ノートを設置しました。展示の内容だけではなく、学生の発見や感想を書いたワンポイントトークや、寄せ書きに関するコメントも多数寄せられ、多くの方々にコメントをいただきました。冷戦の時代、被爆者の運動を「今」考える重要性についてお書きくださった方も多かったです。展示を作った学生は、戦争だけでなく、冷戦の時代も知らない世代です。今回の展示では、冷戦時代の史料と向き合い考えたことは、今後の学びに大きな力を与えてくれると考えております。

展示期間中にお運び下さった皆様には心より感謝申し上げます。

## 「被爆者の選択」パネル展示をみて

日本被団協事務局次長 濱住 治郎

米ソ冷戦が深刻化する1960年代、原水爆禁止運動が分裂に追い込まれ、日本被団協は大きな試練にさらされました。混乱のなかで、被爆者として主体的に考え、どのように行動し決断をしていったのか、被爆者の記憶のない被爆者にとって一番興味あるところでした。

「被団協連絡」から選ばれた山口清、行宗一（東京）、齊藤義雄（岩手）、森滝市郎（広島）、新開進（大阪）、岩佐幹三（石川）、副島まち（兵庫）、久保仲子（愛媛）らの思いや

提案、「被団協速報」で一人ひとりの被爆者が参加する運動を呼び掛けた伊東壮（東京）。激しい論戦が行われたこの経験が、被爆者一人一人の思想の形成や行動に移したことに繋がり、現在の被爆者運動に至っているのでは、とありました。



また、「核をめぐる現在の国際的な緊張状態は、今回ロシアによって露わにされただけで、本質的には人類が核を手にしてから現在まで地続きでつながっていることを忘れてはなりません」と問いかけています。

パネル展示「被爆者の選択」は、高齢化がすすむ被爆者のこれからの運動と組織を考えるうえでいろいろと示唆を与えてくれました。

みなさんの研究に感謝します。ありがとう。

## 〔2〕核兵器廃絶ネットワークみやぎ 講演会&第1回総会

核兵器廃絶ネットワークみやぎ事務局 川名 直子

11月25日（金）、核廃絶ネットの講演会&第1回総会を福祉プラザで開催しました。

開始前に、東北放送で放映された西山進さんと「おり鶴さん」を紹介するニュース特集のDVDを上映し、参加者全員で西山さんに黙祷を捧げました。



開会あいさつでは、木村緋紗子代表が西山さんのこと、そして講師の栗原さんの紹介をし、「被爆者がなぜ運動を続けているのかを皆さんに考えてほしいし、

運動を続けていってほしい」と訴えました。

講演会では、ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会事務局の栗原淑江さんにお話ししていただきました。栗原さんは、レジュメのほかにもたくさん参考資料とパワーポ

イントの資料を用意してくださいました。長年の取り組みの蓄積の大きさを実感する内容でした。学生時代から取り組んだ被爆者の調査活動では、宮城県の平塚シゲさんはじめ多くの被爆者について調査し、その中で、被爆時の体験だけでなく、その後の人生も含めて聞き取りをすることで、被爆者の本当の思いと核兵器の被害の大きさを学んだといいます。

日本政府が原爆・戦争被害「受忍政策」を言い出したことに被爆者は大きな怒りをもち、「核兵器廃絶と援護法の制定」という二大要求を明確にして運動を作ってきた経緯も詳しく教えてくださいました。そして、平和憲法に立つ新たな立法を目指しているすごさや、核廃絶ネットみやぎが“ノーモア・ヒバクシャ”の拠点になることを期待している、と訴えられました。参加者の感想では、「受忍論を初めて知った。とんでもないことで許せない」という感想が多く寄せられました。講演会の様子は、東北放送の取材があり報道されました。

引き続き第1回総会を行い、事務局からの提案の後、6人の方から議案に対する質問や、栗原さんへの質問と感想、核廃絶ネットへの加入宣言、参加組織の核兵器廃絶に関する取り組みの報告などがありました。参加者から提案された「“ノーモア・ヒバクシャ” 記憶の継承に努力する」という一項を加えて、議案は全て承認され、2023年に向けて取り組みが共有されました。

### 【みなさまへのお願い】

#### 〔1〕 継承する会の活動を多くの方にお知らせください

設立から11年、様々な活動を重ねてきた継承する会ですが、まだまだ広く知られてはいません。会の存在と活動を知っていただくためのフライヤー（リーフレット）の見本をお送りします。資料館、公民館、図書館などの施設に置いていただいたり、平和のつどいで配布するなど、大量にご活用ください。フライヤー・送料とも無料です。

お申し込みは、継承する会の事務局宛にメールでお願いします。

E-mail : [info-kiokuisan@nomore-hibakusha.org](mailto:info-kiokuisan@nomore-hibakusha.org)

#### 〔2〕 日本被団協の「日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名」にご協力ください。（同封）

被団協のホームページからオンライン署名もできます。

<https://www.ne.jp/asahi/hidankyo/nihon/about/online-syomei.html>

ウクライナの戦争も新型コロナの蔓延も、いまだ収束の見通しがつかぬまま年の瀬を迎えました。来年は少しでもよい方向に打開していきたいですね。

みなさま、よい年をお迎えください。